

ルーシー・スティーブソン・イーウェル
(ほんとうにあった話をもとに書かれました)

このお話はオランダでの出来事です。

マリーは宝石箱を開けて、きれいな石を見ると、一つずつ手に持ちました。赤い石、次に緑の石、そして透明な石。

おばあちゃんが寝室のドアをノックしました。「出かけるじゅんぴはできた？」

「もちろん！」マリーは慎重に石を箱の中にもどしました。

これからおばあちゃんがマリーを図書館に連れて行ってくれるのです。でも、ただ本を見るためだけではありません。特別な石がてんじされているのです！マリーはわくわくしてしまし

た。

バスで図書館に着くと、マリーとおばあちゃんは中に入りました。二人は美しい石をてんじたテーブルを見て回りました。ぴかぴかのなめらかな石もありました。面白い形のものもありました。

「これを見てごらん！」おばあちゃんが大きな水晶を指さしました。小さな青いとげが一面につき出ています。

別のテーブルには、小さな丸い石がたくさんありました。マ

ぴかぴかのむらさきの石

もしほんとうのことを言ったら、
お父さんはおこるでしょうか。



イラストレーター：リユース

リーはすべての色を見ました。いちばんはしに、むらさきの石がありました。小さくて、ぴかぴかで、なめらかです。

むらさきの石はまだ持っていなかったな、とマリーは思いました。自分のコレクションにぴったりです。

マリーはあたりを見回しました。おばあちゃんは別のテーブルにいます。ほかにはだれも近くにいません。この小さな石がなくても、気づく人はいないよね？

マリーは石を手にとると、ポケットに入れました。

そのばん、むらさきの石を宝石箱にしまって、マリーはベッドに入りました。

「お話の時間だよ。」お父さんがベッドにすわって、機関誌『フレンド』を開きました。

マリーは毛布にくるまって、耳をかたむけました。間違っただ選択をした後で、くい改めた少年についてのお話でした。

お父さんが読んでいると、マリーはおなかがしめつけられるように感じました。体を横にして、まくらをひっくり返しました。それでも、気分が良くなりません。そしてむらさきの石のことがずっと頭からはなれませんでした。

お父さんはお話を終えると、「大丈夫？」と声をかけました。マリーはどうすればよいか分かりませんでした。お父さんに言ったら、お父さんはおこるかもしれません。

でも、助ける方法を知っているかもしれません。

マリーはゆっくりとベッドからはい出て、箱からむらさきの石を取り出しました。「今日、これを図書館から持って来てしまったの。」マリーの目からなみだがあふれました。「ほんとうにごめんなさい。」

お父さんはマリーをぎゅっとだきしめました。「お父さんにはいつでもほんとうのことを話していいんだよ。正直になる勇気を持っているマリーをほこりに思うよ。」

マリーのおなかの具合は良くなりました。お父さんはおこっていません！

「そして、イエス様のおかげで、くい改めることができるんだ。さっきのお話と同じようにね」とお父さんは言いました。「一緒にその石を図書館に返しに行かないかい？」

マリーは目をぎゅっとつむりました。「いやよ！おこられるわ。」

お父さんは、マリーのかたに手を置きました。「図書館の人



は少しおこるかもしれないね。でも、石を返せばよろこんでくれるんじゃないかな。そしてマリーも気持ちはずっと楽になると思う。」

マリーは深呼吸してからうなずきました。「分かったわ。」

マリーは紙を1まい取り出すと、手紙を書き始めました。「この石を取ってしまっごめんなさい」と書きました。「こんなことをしなければよかったです。間違いを正したいと思います。」

マリーは手紙をふうとうに入れ、それから、小さなむらさきの石も中に入れました。

「明日これを返しに行こう」とお父さんが言いました。「今はどんな気分だい？」

「さっきよりいいわ」とマリーは答えました。「しなくちゃいけないことがもう一つある。」

マリーはベッドの横にひざまずいてのりしました。「石を取ってごめんなさい」とマリーは言いました。「もう二度とめすみません。勇気を出して正直になれるように助けてくださって感謝します。」

ベッドにもどると、マリーは平安を感じました。明日、マリーは間違いを正すつもりです。そして天のお父様とイエス様が助けてくださると、マリーは知っていました。御二方のおかげで、すべてはうまくいくでしょう。●